令和3年5月23日(日)　　朝日新聞　奈良県版　朝刊　19面

トーク　トーク　トーク

共創の大学院像 内外へ発信

奈良先端科学技術大学院大学長　塩崎一裕さん

国立大学法人・奈良先端科学技術大学院大学（生駒市）では、国内外から集まった学生や研究者が、最先端の研究を進めている。今年は創立30周年の節目。今後の方向性や課題について、4月1日付で学長に就任した塩崎一裕さん(57)に聞いた。

――就任後に16の目標と戦略からなる「学長ビジョン2030」を打ち出しました。主な狙いは。

柔軟な教育態勢を構築するため、2018年に情報科学、バイオサイエンス、物質創成科学の各研究科を「先端科学技術研究科」に統合した。垣根を越えたコミュニケーションができるようになると、互いの分野についての理解も深まる。いろんなアイデアが出し合えることにもつながった。

そこで、「共創」をキーワードに新たな大学院像を創り、レベルアップを図っている。異分野の学生がいるという強みを生かした課題解決型融合研究の創出、次世代の価値を創造する先導的な人材の育成など。SDGs（持続可能な開発目標）やカーボンニュートラル（脱炭素）など、社会的な課題に挑む力も育みたい。

――「足元からの大学ブランディング」も挙げています。

学生は海外経験者も多く、留学生は東南アジアを中心に4人に1人ぐらいいる。このため、英語しか使わない授業を設け、英語だけで学位が取れるようにしてきた。逆に、日本で働きたいという学生のために日本語を学ぶ科目も設けた。国際化に応じた教育研究環境の一例で、優れた研究成果も数多い。でも、意外と学内でも知られていない。

これらの情報を教職員や学生、卒業生らが共有することで母校に誇りを持ち、帰属意識を高めてほしい。同時に、外に向かって発信していくことも必要だ。

――確かに、奈良先端大の「知名度」の向上は長年の課題です。

学生が「奈良先端大に行きたい」と思っても、親御さんに「それ、どこ？」と言われることが多い。「すごい研究をすればうけるのでは」と思いがちだが、それだけでは足らない。戦略企画本部に広報態勢を強化してもらっている。

例えば、奈良県立医大と進めている共同研究、今年が市制施行50周年の生駒市と予定している合同行事などがある。こうした動きをこまめにメディアに発信するほか、人気のある市民公開講座を学外で開いたり、研究現場を市民のみなさんに体験してもらったりするのも一つの工夫だ。

――様々な基礎研究の成果について報道発表は多いですが、難解です。

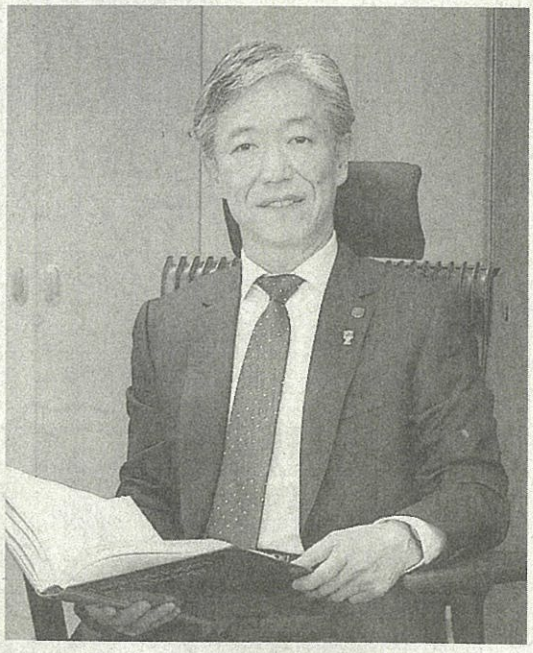
専門外の人でもわかるように「翻訳」することは大きな課題だ。研究のエッセンスを一般の人の目でかみ砕いて表現してもらうことを実験的にやってみたい。

学内コミュニケーションを工夫して、研究者自らが最先端の研究のおもしろさを他分野の人たちに説明する、トレーニングのような場があってもいい。

――地元の中学生や高校生たちに期待することは。

どこの大学に進んでも大学院を選ぶ際は奈良先端大にきてほしい。日本では自分が学んだ大学の大学院に進むことが多いですが、欧米ではよその大学院を選ぶのが一般的。環境も教員も違うし、知り合いが増えるから。とくに奈良先端大は大学院しかないので各地から学生が集まる。ネットワークが広がるだけでなく、新しい発想や考え方にふれることで多様性が生まれるのではないか。

（聞き手・伊藤誠）



しおざき・かずひろ　和歌山市出身。京都大大学院修了（理学博士）。専門は分子細胞生物学、酵母分子遺伝学。米国・カリフォルニア大デービス校微生物学科教授、奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科（当時）教授、同学長補佐などを歴任し、今年4月から現職。米国細胞生物学会などに所属。8年ほど前から週1回のジョギングが息抜きで、ダッシュを交えて川沿いの約8キロを走る。